



筑紫女学園大学リポジト

Reconsideration of Resultative Constructions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/964

結果構文再考

緒 方 隆 文

Reconsideration of Resultative Constructions

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿は結果構文を、カテゴリースキーマの観点から分析する。カテゴリースキーマとは、カテゴリーと成員の関係をスキーマで表し、それにより構文や動詞の意味を示すものになる。結果構文は緒方(2017)で分析したが、それを大幅に修正する。緒方(2017)では、結果構文の基本の意味を〈出現〉と〈移動〉とし、主語が関与する場合としない場合があったとした。しかし本稿では、結果構文は共通して一つの基本スキーマを持つとする。このときスキーマの構成員の違いや、ゲシュタルト化の違いによって、様々な意味が生じるとする。さらに主語と、この基本スキーマの関わり方が意味によって異なることも見ていく。また基本スキーマ及び基本スキーマをもとにしたスキーマにより、結果構文に様々な制約がかかることも示していく。なお結果構文には類する表現が数多くあるが、何が結果構文に含まれるかは意見が分かれる。本稿は結果構文の基本スキーマを共有するものは、すべて結果構文と見なしていく。

以下の構成は2節で結果構文の基本スキーマを示し、3節で他動詞の結果構文、4節で自動詞の結果構文を見ていく。そして5節で使役移動構文が結果構文に含まれることを示す。最後に6節で結果構文にかかる制約について見ていく。

2. 結果構文におけるスキーマ

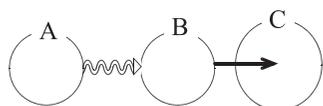
結果構文は、動詞が表す行為により何らかの変化が生じ、その結果部分を結果述語で表現するものを言う。結果述語は本動詞と単一文句中に現れなければならない、複文や重文として結果述語と本動詞が別々に表現されてはならない。典型的には[主語+動詞+目的語+結果述語]の形式をと

るが、動詞には自動詞も現れるので、目的語が現れない場合もある。具体的には次のような例がある。(1)は他動詞の結果構文、(2)は自動詞の結果構文になる。

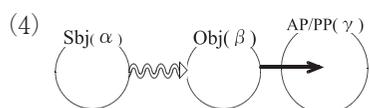
- (1) a. She pounded the dough flat as a pancake.
 b. She pounded the dough into a pancake. (Carrier and Randall 1992: 183)
- (2) a. The icecream froze solid. b. I laughed myself sick. (Simpson 1983: 143, 145)

これらの結果構文は共通してスキーマ(3)を基本とすると考える。

(3) 基本スキーマ



(3)ではAがBに作用し、BがCに変化することを表している。本稿は変化することを、Bが属性Cの成員になると表記する。属性の成員になることで、その属性を持つ(変化が生じる)と考える。典型的には(4)のようなスキーマになる。(4)では、主語 α が動詞の行為により目的語 β に作用し、 β が変化する。 β が変化することを、結果述語 γ の成員になると表記している。 γ は典型的には、形容詞句または前置詞句が現れる。



この結果述語 γ には、形容詞句、前置詞句だけが現れるわけではない。それ以外に名詞句、不変化詞も現れる。(5)は名詞句の例、(6)は不変化詞の例になる。

- (5) a. I painted the car a pale shade of yellow. (Simpson 1983: 143)
 b. They painted their house a hideous shade of green. (Carrier and Randall 1992: 173)
- (6) a. John ate himself up. b. The boxer knocked him out. (中村 2003: 136)

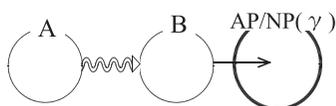
しかし(7)に示すように、現在分詞と過去分詞は結果述語にならない。(7a)は他動詞の結果構文、(7b)は自動詞の結果構文であるが、いずれも分詞の結果述語は認められない。

- (7) a. The maid scrubbed the pot {shiny/*shined/*shining}.
 b. The joggers ran themselves {sweaty/*sweating/exhausted}.
- (Carrier and Randall 1992: 184)

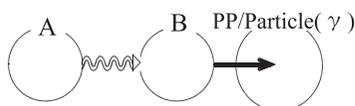
これは分詞が動的な意味を持つからと考えられる。基本スキーマ(3)に示すように、結果Cは属性という状態であり、静的なものである。そのため動的な意味を持つ分詞は、結果述語として不適格となる。

ここで結果述語の品詞による違いを考えたい。形容詞句、前置詞句、名詞句、不変化詞では焦点の当て方が異なる。形容詞句と名詞句では結果状態に焦点があたり、前置詞句と不変化詞では変化プロセスに焦点があたる。スキーマで表せば(8)のようになる。(8a)では結果状態が太線、(8b)では変化プロセス部分が太線となっており、それらに焦点が当たるとを示している。

(8) a. 形容詞句/名詞句



b. 前置詞句/不変化詞



この焦点の違いにより、片方の表現しかとらない動詞がある。小野(2007: 20)は(9)の例を挙げながら、PPは継続的動作を表す動詞とも瞬間的動作の動詞とも共起するが、APは瞬間的な動詞とのみ共起すると述べている。この理由としてPPが「経路」的意味を含むからとしている。

(9) a. The rabbits had apparently been battered { *dead / to death }.

b. He and a confederate shot the miller { dead / to death }. (Wechsler 2005: 266)

(9a)ではbatterすることで瞬間的に死なせることはほぼないので、経路の意味となり、形容詞が不適格となっている。(9b)では、瞬間の意味にも継続の意味にもとれるので、両方適格となる。一方動詞によっては、結果述語にAPはとれるがPPがとれないものもある。

(10) a. Kenny killed us dead. b. *Kenny killed us to death. (Boas 2003: 221)

killは瞬間的動作であり、プロセスに焦点を当てるのが難しい。そのため前置詞句の結果述語が不適格になると考えられる。よって単純にPPは継続的動作と瞬間的動作の両方をとれるとは言えない。瞬間性が強い動詞は、PPを認めなくなる。

つまり両方の表現を認めるか、片方のみを認めるかは、動詞の含意次第になる。焦点の違いから考えると、(8a,b)は二者択一的にはっきりと区別されるものではなく、どちらかというところ、こちらの方がより焦点が強くなる程度と考えられる。そのため両方とれる動詞も多々ある。しかし違いがあるため、使い分けが起こる動詞もある。これは動詞そのものが持つ意味によって決まると言える。重要なことは、結果述語の品詞の違いによって、焦点の当て方には違いがあり、意味に違いが生じることにある。

この焦点化の違いにより、前置詞句に制限が生じる。変化プロセスに焦点を当てることから、動的な前置詞に限られ、状態を表す前置詞は不適格になる(cf. 中村 2003: 135)。(11a)(12a)では動的な前置詞 out of, into は適格だが、(11b)(12b)では前置詞 on, in は状態を表し不適格となる((11)(12)は中村(2003: 135))。結果述語の前置詞句は、変化プロセスを想起させるものでなければならないのである*1。

(11) a. They laughed John out of the stage. b. *They laughed John on the stage.

(12) a. The man smashed the glass into pieces. b. *The man smashed the glass in pieces.

このように結果述語の品詞により、焦点の違いが生じ、適格性に差がでることがある。しかし以下の議論では、簡略化のため焦点の違いは表記せずに、基本スキーマ(3)のようにどちらも併記した形で示し、焦点の違いは表記しないこととする。そして結果構文の典型的な結果述語である、形容詞句と前置詞句を中心に議論していく。

4. 自動詞の結果構文

自動詞の結果構文は、非対格動詞と非能格動詞でスキーマが異なる。まず非対格動詞の場合、もともと目的語にあったものが主語に現れる。そのため主語ではあるが被動者の意味を持つ。内項が主語になっているため、(17)に示すように、追加で再帰代名詞を加えることができない。

(17) a. The river froze solid. (*The river froze itself solid.)

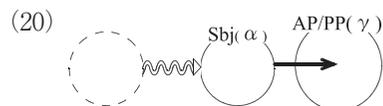
b. The door broke open. (*The door broke itself open.) (小野 2007: 8)

主語に来るものが元々目的語であったことは、対応する他動詞の結果構文からも見てとれる。

(18) a. I froze the icecream solid. b. The icecream froze solid.

(19) a. I broke the vase into pieces. b. The vase broke into little pieces. (Simpson 1983: 143)

(18a)(19a)の他動詞構文では目的語であったものが、(18b)(19b)の自動詞構文では主語として現れている。主語は元々目的語にあって被動者であることから、非対格動詞のスキーマは(20)になる。



(20)は基本スキーマを踏襲しているが、行為者が特定されない。特定されないものからエネルギーを受け、主語が変化する。主語は行為を受けることから、被動者になる。このとき主語は、この結果出現に関してなんら関与していないため、基本スキーマの外側に主語カテゴリーは現れない。そのため非対格動詞の結果構文の意味は、基本スキーマ部分のみで表記されることとなる。

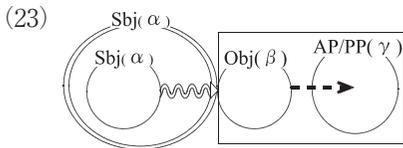
次に非能格動詞の場合であるが、これには2種類ある。一つは(21)のように、非選択的な目的語をとる。(21)では、自動詞が目的語に直接働きかけているのではなく、目的語の変化全体に作用する。そのため自動詞の意味で、結果部分を省略する(22)は不適格となる。

(21) a. The joggers ran their Nikes threadbare.

b. He sneezed his handkerchief completely soggy. (Carrier and Randall 1992: 173)

(22) a. *The joggers ran their Nikes. b. *He sneezed his handkerchief.

このときスキーマは(23)になる。(23)では、目的語の変化全体が□で囲まれている。これは主語の作用が、目的語のみに及ぶのではなく、□全体に及ぶことを表している。また主語が関与するのは行為のみであって、結果部分については関与しない。そのため基本スキーマの前半部分(行為)のみに、主語カテゴリーが関与する(行為を成員として持つ)。ただし動詞の含意から自然に導かれない派生的結果であるため(破線矢印で表記)、主語カテゴリーは強く関与する。そのため主語カテゴリーは二重線で表記される*⁴。ここでは繰り返し走るとか、大人数で走るなどの意味が生じ、結果が生じるよう主語が強く関わることを含意する。



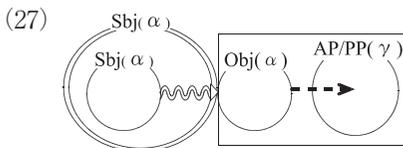
非能格動詞の二つめに、(24)のように擬似再帰代名詞を目的語にとるものがある。目的語に現れる再帰代名詞は、一見随意的にも思えるが、(25)のようにないと非文になる((24)(25)は Carrier and Randall 1992: 215)。またここでも(26)のように、目的語のみだと非文になる。

- (24) a. The tenors sang themselves hoarse. (25) a. *The tenors sang hoarse.
 b. Joggers often run themselves sick. b. *Joggers often run sick.
 c. The tourist walked themselves ragged. c. *The tourists walked ragged.

(26) *Dora shouted herself. (cf. Dora shouted herself hoarse.)

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 35)

このときスキーマは、(23)とほぼ同じ(27)になる。



スキーマ(23)と(27)の違いは、目的語が主語と同じ α になっている。再帰代名詞だからである。(23)と同様、主語は目的語(自分自身)のみに働きかけているわけではない。ここでも主語の作用が□全体に及んでいる。また派生的結果ゆえに、主語カテゴリーが関与するのは、主語の行為部分のみになる。ここでも派生的結果なので、主語カテゴリーは二重線で表記されている。

(25)のように再帰代名詞が必須なのは、基本スキーマ(3)に適合するためである。再帰代名詞が挿入され、変化の主体が明確になる。変化するものが明記されないと、そもそも何の変化結果か分からない。結果構文において、行為者である主語はそのままでは変化対象にはならないのである。

なお(27)のスキーマを持つものに、(28a)(29a)のように目的語が省略された他動詞がある。これが結果構文になったものが(28b)(29b)である。ここでも自分自身を食べたり、飲んだりするわけではないので、変化全体に作用が及び、結果が生じる(スキーマも(27))。主語が食べたり飲んだり摂取することで、第三者に変化を生じさせることは通例できないため、(28c)(29c)は非文となる。

- (28) a. I ate all day. (29) a. He drank all through the evening.
 b. I ate myself sick/to death. b. He drank himself into the grave/to death.
 c. *I ate him sick/to death. c. *He drank her into the grave/to death.

(Simpson 1983: 145)

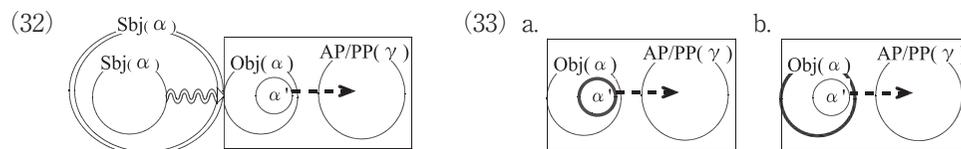
以上を簡単にまとめると、自動詞の結果構文は基本2つのスキーマを持つ。一つは非対格動詞

の結果構文、もう一つは非能格動詞の結果構文になる。非対格動詞の結果構文は、基本スキーマ部分のみで、行為者が特定されない。一方非能格動詞の結果構文は、主語カテゴリーが主語の行為部分にのみ関与し、結果部分がゲシュタルト化し、全体で行為の作用を受けて変化結果が生じる。このとき目的語が主語と同じ α になる場合と、それ以外の β になる場合がある。

ここで目的語に身体部位名詞句がくる場合と、誇張表現について見ていく。まず身体部位名詞句であるが、(30)のように、主語の一部分が身体部位名詞句として目的語に現れる。(30a)では he と his throat、(30b)では I と my eyes、(30c)では he と his face が各々、全体-部分の関係になっており、いわばシネクドキの関係になっている。この中には(31)のように、擬似再帰代名詞と置き換えができるものがある。

- (30) a. He talked his throat hoarse. (31) a. He talked himself hoarse.
 b. I cried my eyes blind. b. I cried myself blind.
 c. He talked his face blue. c. He talked himself blue. (野中・貝森 2016: 163)

このとき身体部位名詞句と擬似再帰代名詞はどちらも同じスキーマ(32)を持つと考える。(32)は(27)と基本同じである。目的語が主語と同じ α になっていて、派生的に結果が生じることから、主語カテゴリーの外にゲシュタルト化した形で、動詞の作用を受けている。ただ異なるのは、目的語 α がそのまま変化するのではなく、その一部が変化することにある。



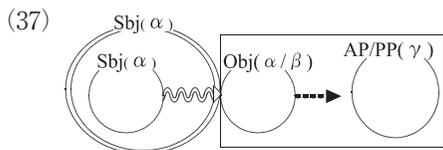
このとき目的語が身体部位名詞句になるのか、擬似再帰代名詞になるのかは、単に焦点の違いと考える。変化部分だけを取り上げて示したのが(33)になる*5。身体部位名詞句では(33a)に示すように、部分に焦点があたる。一方擬似再帰代名詞では(33b)に示すように、目的語全体に焦点があたる。この違いが表現の違いとなる。そして(33)に、(32)に示すように主語の作用が働く。

そのため、擬似再帰代名詞と身体部位名詞句は単に一つのスキーマ上での焦点の違いにすぎない。しかしすべてが、同じ意味で置き換えられるわけではない。(34)(35)ではシネクドキの関係が成り立たないため非文となっている。(36)では擬似再帰代名詞と身体部位名詞句では、意味が異なる。それはシネクドキの関係が成り立たないからである。そのため身体部位名詞句と擬似再帰代名詞の交替は、焦点の違いであるが、その前提として全体-部分のシネクドキの関係が成り立つ必要がある。

- (34) I cried { my eyes / *myself } out.
 (35) I laughed { *my head / myself } silly. (野中・貝森 2016: 165)
 (36) a. He washed his hands clean. b. He washed himself clean. (野中・貝森 2016: 167)

最後に誇張表現がある。誇張表現はもっぱら自動詞、とりわけ非能格動詞の結果構文であられる。すでに(30b,c)(34)などは誇張表現にあたる。誇張表現では、スキーマ的には基本スキーマ

マでCの部分に到達しないだけの違いになる。つまりスキーマで変化対象が変化結果に到達しないスキーマになる。これを示したものが、(37)になる。類例を(38)にあげる。



- (38) a. The children laughed themselves silly.
 b. The girl cried her eyes out.
 c. She drinks me under the table.

(影山 2005: 93)

5. 使役移動構文

典型的な結果構文は、状態変化を表す。結果述語は、状態変化した後の状態を表す。しかし状態変化だけでなく、位置変化もまた、基本スキーマ(3)で表すことができる。(39)は、位置変化を表す結果構文になる。(39a,b)が自動詞の結果構文、(39c,d)が他動詞の結果構文になる。

- (39) a. Frank sneezed the napkin off the table.
 b. The audience laughed the poor guy off the stage. (a,b: Goldberg 1995: 154)
 c. He wrenched the gun out of her hand. (山根 2013: 60)
 d. She scrubbed the dirt out of her skirt. (Napoli 1992: 57)

(39)は使役移動構文といわれる例で、主語の行為により目的語が結果である場所へ移動する。このときスキーマは(39a,b)の例では(23)(27)(32)、(39c,d)の例では(15)になる。つまり基本スキーマ(3)に適合するので、すべて結果構文と見なす。状態変化と位置変化は変化ということで、スキーマを共有しており、いわば近い関係にある。これらはスキーマを共有することから結果構文となる。

ただし移動構文すべてが、結果構文になるわけではない。どこまで移動構文を、結果構文に含めるかは重要で、分析に大きく影響を及ぼす。広げれば広げるほど、典型例であてはまっていたことが、当てはまらなくなり、反例と思われる例が生じる可能性がでてくるからである。本稿では基準を基本スキーマ(3)におき、適合すればすべて結果構文と見なしていく*6。

しかし移動変化を表す構文には、いくつか種類がある。移動変化には、使役移動構文、非使役的な方向性移動動詞、移動様態動詞など、どこまで結果構文に含まれるか意見が分かれる(cf. 小野 2007: 6)。具体的に見ると、(40a)は非使役的な方向性移動動詞の例、(40b)は移動様態動詞の例になる。

- (40) a. We arrived at the airport. (方向性移動動詞)
 b. John walked to the store. (移動様態動詞) (小野 2007: 6)

しかし(40)はどちらも結果構文とはならない。というのも基本スキーマ(3)のBにあたる被動者が存在しないからである。基本スキーマに適合しないため、これらは結果構文とはならない。

以上見てきたように結果構文における変化は、状態変化だけでなく位置変化も含める。ただしすべての変化が結果構文になるわけではなく、スキーマ(3)に適合するものを結果構文と考える*7。

6. 結果構文にかかる制約

6.1 直接目的語制限

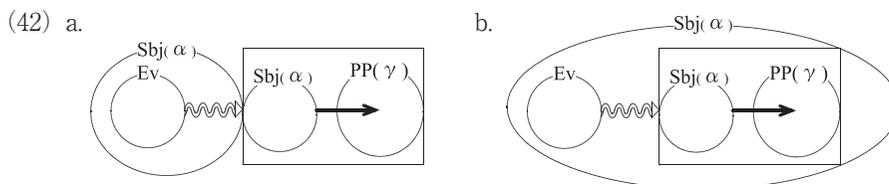
結果構文には、Levin and Rappaport Hovav(1995)が提案した直接目的語制限があると言われてきた。結果構文で変化するのは直接目的語に限られるというものである。これもまた基本スキーマ(3)から導かれる。基本スキーマ(3)で、被動者が変化するのが結果構文だからである。被動者は、他動詞であれば目的語、自動詞であれば非対格動詞の主語(もともと目的語の位置に生起)、非能格動詞の目的語(偽の目的語)になる。そのため一貫して直接目的語(内項)が変化し結果が生じることとなる。

しかしこれには一見して例外がある。(41)では、結果述語が主語を叙述している。

- (41) a. The wise men followed the star out of Bethlehem.
b. The sailors managed to catch a breeze and ride it clear of the rocks.
c. He followed Lassie free of his captors. (a,b,c: Wechsler 1997: 313)
d. John danced mazurkas across the room.
e. The children played leapfrog across the park. (d,e: Verspoor 1997: 151)

ここで共通して言えることは、二つある。一つは、動詞と目的語の関係を考えると、目的語は被動者になり得ない。つまり行為の作用によって、目的語は何ら変化しない。そのため主語が変化することとなり、結果述語が主語を叙述している。もう一つの特徴は、変化がすべて位置変化であることにある。これら動詞は状態変化を起こせないため、二次述語でさらに状態変化を起こすことができない。では(41)のような例は、結果構文なのだろうか。本稿では(41)のような結果述語が主語を叙述するものも、結果構文とみなす。つまり基本スキーマ(3)に適合していると考えられる。

ではどのように、これらの文が基本スキーマに適合するのだろうか。本稿は以下のように考える。変化を引き起こすものは主語ではなく、[主語+動詞+目的語]部分のイベントとする。このイベントにより、主語の位置変化という結果がもたらされる。これをスキーマで表記したものが(42)になる。(42a)では主語が位置変化を意図しない場合、(42b)では位置変化を意図する場合になる。主語の強い関与はどちらも感じられないので、一重線となっている。



(42)は基本スキーマ(3)に適合する。そのため(41)のような例はすべて結果構文とみなしていく。ここで直接目的語制限を言い換える必要がある。結果述語は目的語以外を叙述することがあるからである。

(43) 変化主体制限：結果述語は、結果構文の基本スキーマにおける変化主体を叙述する。

6.2 一義的経路の制約

二つの結果述語が単文中に現れると、通例(44)に示すように不適格となる。

(44) a. *John kicked her bloody dead. b. *John wiped the table dry clean. (中村 2003: 130)

これは一義的経路の制約(Goldberg 1995: 82)によって説明されてきた、一義的経路の制約とは、Xが具体物の場合、単文内でXを2つ以上の異なる経路について叙述できないとするものである。よって次のような一見例外と思える例は反例とならず、制約は維持される。

一つは松井・影山(2009: 274)があげる、(45)のような例である。beautifullyは主観的な副詞であるため、経路が二つあるわけではない。そのため経路以外の副詞とは当然共起しても制約違反とはならない。

(45) Ralph dyed his hair black beautifully.

もう一つは変化結果が追加される例である。これは他動詞でも自動詞でも起こる。例を(46)に示す。(46a)ではflatの後にinto a pancake-lake stateが、(46b)ではsolidの後にinto a crusty massが追加されている。

(46) a. He pounded the dough flat into a pancake-lake state.

b. The liquid froze solid into a crusty mass. (影山 1996: 221)

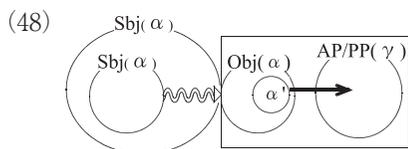
この場合一見、経路が二つあるかのように見えるが、二つは一つの経路の延長線上にあることが分かる。より詳細に述べているだけで、経路が二つあるわけではない。基本スキーマ(3)で言えば、結果述語の後ろに追加されているにすぎない。そのため基本スキーマは保持されている。(46)のような例もまた結果構文に含めることができる。

そもそも一義的経路の制約は状態変化と位置変化が単文中に一緒に現れることを禁止するものである。そのため(45)(46)は正しく説明がなされる。しかし結果構文には、状態変化と位置変化が単文中で現れているように見える例がある。(47)では状態変化から、位置変化が起こっている。

(47) a. The butcher sliced the salami onto the wax paper.

b. Joey clumped his potatoes into the middle of his plate. (Goldberg 1995: 171)

ここでは行為によって状態変化がおき、状態変化の産物が移動するという意味になっている。これは(32)と似た(48)のスキーマになる。(32)との違いは、動詞の行為が分離や結合を前提としているので、動詞に移動の含意があると考えられる。sliceやclumpすることで分離や結合する。そのため移動プロセスが実線となっている。このとき主語カテゴリーの関与は強い必要はないので、一重線で表記される。(32)ではもともとと身体部位名詞句の結果構文を説明するスキーマであった。そこでは純粋に一部分が変化することを述べていた。しかしここでは状態変化の産物が移動する。しかしよく見ると、salamiはsalamiであるしpotatoはpotatoのままである。そのため(48)のように、a'が移動すると考える。このとき基本スキーマ(3)と適合し、結構構文とみなされる。このとき一義的経路の制約も守られる。



この(48)から、主語の非意図的な行為によって偶然に結果が生じる(49)のような例が説明される。

(49) a. Sam | carelessly/accidentally | broke the eggs into the bowl.

b. The machine sliced the salami onto the wax paper. (奥野 2003: 169)

(49a)では carelessly/accidentally などの副詞が付加され、主語の行為が非意図的だったことを示している。また(49b)では主語の the machine に意図などあるはずもなく、ここでも非意図的である。つまり主語の積極的な関与がないにも関わらず、結果が生じている。(49)は(48)のスキーマを持つと考えられる。このとき、主語は行為のみに関与し、強く関与する必要はない。そのため非意図的な行為により結果が生じる意味が可能となる。

6.3 基本スキーマに違反

ここでは結果構文の基本スキーマに適合しないために、非文となるか、適格ではあるが結果構文と見なせない例を見ていく。結果構文には類する表現も多く、明確に何をもって結果構文とするかは、時として曖昧になりがちである。本稿ではその基準は、基本スキーマ(3)であると考えていく。

6.3.1 動詞

基本スキーマ(3)によって、動詞に制約がかかる。基本スキーマ(3)では、動詞は行為によって変化を起こさせなければならない。そのため単なる知覚/接触/認識/受容では、そうした変化にいたらず、結果自体が生じない。そのため(50)のような例は不適格になる。(50a)が知覚動詞*⁸、(50b)が接触動詞、(50c)が認識動詞、(50d)が受容動詞の例になる。すべて未達成の意味で、目的語に変化を起こす力がない。

(50) a. *Medusa saw the hero stone/into stone.

b. *Midas touched the tree gold/into gold. (a,b: Simpson 1983: 146-7)

c. *He believed the idea powerful. (Goldberg 1995: 181)

d. *Max received the letter flat. (Jackendoff 1990: 230)

同じ理由で前置詞を伴う動能構文も、(51)に示すように不適格となる。前置詞が入ることで、結果の出現を含意しない。結果が生じないことから、基本スキーマ(3)と矛盾し、不適格となる。

(51) a. He shot the bear dead. b. *He shot at the bear dead. (影山 2001: 160)

また動詞による行為とその結果の関連性が離れすぎると不適格となる。結果出現に行為が作用したと考えられないためである。このとき基本スキーマ(3)と矛盾する。

(52) a. Mary dyed the dress pink/??stiff/*small. (Washio 1997: 10-11)

b. *He hammered the metal beautiful/safe/tubular. (Green 1974: 84)

さらに(53)のように動詞によって実現不能の場合も、当然ながら不適格となる。

(53) a. *The bears frightened the campground empty.

(cf. The bears frightened the hikers speechless.)

b. *The baby shattered the oatmeal into portions.

(cf. The baby shattered the porringer into pieces.) (Carrier and Randall 1992: 187)

6.3.2 様態

ここでは適格な文ではあるが、基本スキーマ(3)と合致しないために、結果構文と見なせない例を見ていく。まず結果構文と似ているが、行為の様態を表す表現がある。Washio(1997)で言われた Spurious Resultative(見せかけの結果構文)に相当する例になる。(54)に示すように副詞と置き換えても、ほぼ同じ意味になる。

(54) a. He tied his shoelaces tight/tightly. d. He spread the butter thin/thinly.

b. He tied his shoelaces loose/loosely. e. He cut the meat thick/thickly.

c. He spread the butter thick/thickly. (Washio 1997: 17)

(54)の形容詞は結果表現ではない。行為の様態を示しているに過ぎない。そのため副詞と置き換えてもほぼ同じ意味になる。この場合結果を表現しているわけではないので、基本スキーマ(3)に適合しない。そのため結果様態を表す表現は、結果構文には含めないこととなる。

これと似た例で(55)のような例がある。これらは移動した結果、どのような様態になっているかを示している。これもまた下線部が結果となっておらず、結果の様態を示すにすぎない。ここでも基本スキーマ(3)と合致しないため、結果構文とはみなさない。

(55) a. John put a cup on the table upside-down. c. Bill lay down flat on his back.

b. Mary put on a shirt inside-out. (宮腰 2009: 228)

次に(56)のような例では、結果述語のところに、結果に対する評価が入っている。これもまた worthless という結果になったわけではない。そのため基本スキーマ(3)と適合しない。

(56) *Bill broke the vase worthless. (Jackendoff 1990: 240)

最後に Geuder(2000)が副詞的結果述語と呼ぶ例を考える。(57)では2つの解釈があり、一つは着た結果が elegant という解釈、もう一つは着るプロセスが elegant という解釈になる。ここでは一つめの解釈が結果を表しているのではという感がある。

(57) She dressed elegantly. (Geuder 2000: 69)

しかし(57)は結果構文ではない。というのも着る行為によって、elegant という結果が引き起こされた訳ではないからである。つまり副詞的結果述語を伴う表現は、基本スキーマ(3)と適合しないため結果構文ではない。

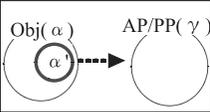
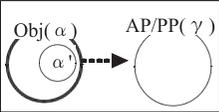
このように単に結果や結果様態を表しているからといって、そのまま結果構文とはならない。

本稿では基本スキーマ(3)と合致するものを、結果構文と見なしていく。

7. まとめ

本稿では結果構文をカテゴリー分析の観点から再考した。ここでの結論は、結果構文は基本スキーマ(3)を共通して持つとした。結果構文には自動詞もあれば他動詞もある。それにも関わらず、この基本スキーマ(3)に適合するよう構文が作られている。とりわけ自動詞の結果構文において、擬似再帰代名詞をとるなど、基本スキーマに合うように構文が作られる。また結果構文にかかる制約では、直接目的語制限は修正を行ったが、一義的経路の制約においては基本スキーマ(3)に基づく結果構文すべてに適用されるとした。結果構文は二次述語による表現である。二次述語には叙述表現もある。この叙述表現も含めた二次述語を、カテゴリー分析で行うことを今後の課題としたい。

注

- *1. 一方形容詞においては、スケール構造が問題になることがある。形容詞の段階性のあり方や、動詞が本来持つ *telicity* との関連などアスペクトに関する問題も生じる。本論では紙幅の関係もあり、ここでは取り扱わないこととする。
- *2. Wahio(1997)では強い結果構文、弱い結果構文と呼び、高見(1997)では、語彙的結果構文と論理的結果構文として分類している。
- *3. すでに指摘されているように、人以外のものが主語にくる結果構文を適格とする人たちがいる (cf. Goldberg 1995: 193)。しかしこの場合でも、主語の作用が強いために、意図性がなくとも、主語が持つ属性により結果に対して強い関与があると感じられるからと考える。
 - (i) The jackhammer pounded us deaf. (Randall 1982)
- *4. (21)タイプの結果構文の適格性は、個人差が大きい。Jackendoff(1990: 227, 230-1)では以下のような例は容認性が落ちると述べている。動詞による結果が、その個人にとって慣習的と感じるかどうかも影響していると考えられる (cf. 都築 2004: 97)。
 - (i) a. ?The rooster crowed the children awake.
 - b. ??The boxers fought their coaches into an anxious state.
- *5. (30b,c) (31b,c)は正確には(33)とは異なるスキーマになる。というのもこれらは誇張表現なので、結果に到着することはない。そのため(i)の (i) a.  b.  ようなスキーマになる。しかし論点をすっきりさせるため、(33)のみを示している。
- *6. Simpson(1983: 147)が示す(i)のような位置変化動詞は、結果構文の意味を持ち得ない。というのも主語はあくまで移動の主体者であって、被動者にはならないからである。このとき基本スキーマ(3)

にも矛盾している。

(i) *He fell (down) dead. (結果構文の意味で)

- *7. 緒方の一連の研究において、これまで構文の意味を意味のネットワーク上に配置し、その意味拡張の経緯を示してきた。結果構文は結果部分に着目すれば、〈移動〉を基本とし、〈出現〉に意味が拡張すると考えられる。すなわち結果状態あるいは移動着点に移動するという意味と、結果状態が新たに出現するという意味があり、前者が優勢と考えられる。

しかしこれと平行して、基本スキーマ(3)の前半部分、すなわち行為の作用の部分における意味は〈行為対象〉の意味になっている。つまり〈行為対象〉と、〈移動〉または〈出現〉が複合的に結合している。この複合的な意味を、意味ネットワーク上にどう配置するかは現在課題となっているため、本稿では意味ネットワークを示さないこととする。ただ結果構文においても、他構文と同様に意味のネットワーク上で意味拡張を示すことができるのではと予測する。

- *8. 中村(2003)が述べるように、知覚動詞であっても結果を導く文脈では適格となる。

(i) a. John stared her into silence. b. A lover's eyes will gaze an eagle blind. (中村 2003: 130)

参考文献

- Boas, H. C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*. Center for the Study of Language and Information: Stanford.
- Carrier, J., & Randall, J. H. (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry*, 23, 173-234.
- Geuder, Wilhelm. (2000) *Oriented Adverbs: Issues in the Lexical Semantics of Event Adverbs*. Doctoral Dissertation, Universität Tübingen.
- Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press: Chicago.
- Green, G. M. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*. Indiana University Press: Bloomington.
- Jackendoff, R. S. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press: Cambridge, MA.
- Levin, B., & Hovav, M. R. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press: Cambridge.
- 影山太郎(1996)『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版。
- (2001)「結果構文」影山太郎(編)『日英対照動詞の意味と構文』, 154-181, 大修館。
- (2005)「辞書の知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」『レキシコンフォーラム』(1), 66-101, ひつじ書房。
- 松井夏津紀・影山太郎(2009)「副詞と二次述語」影山太郎(編)『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』, 260-292, 大修館書店。
- 宮腰幸一(2009)「日英語の周辺の結果構文—類型論的含意」小野尚之(編)『結果構文のタイポロジー』,

- 217-265, ひつじ書房.
- 中村捷(2003)『意味論－動の意味論』開拓社.
- Napoli, D. J. (1992) "Secondary Resultative Predicates in Italian," *Journal of Linguistics*, 28: 53-90.
- 野中大輔・貝森有祐(2016)「英語の身体部位目的語結果構文と再帰代名詞目的語結果構文の交替」『東京大学言語学論集』37(1), 161-170.
- 奥野浩子(2003)「結果構文に対する「被動者制約」と構文融合」『人文社会論叢. 人文科学篇』9, 159-170.
- 緒方隆文(2017)「結果構文とカテゴリー」『筑紫女学園大学人間文化研究所年報』第28号, 113-127.
- 小野尚之(2007)「序論—結果構文をめぐる問題」小野尚之(編)『結果構文研究の新視点』, 1-31, ひつじ書房.
- Randall, J. (1982) "A Lexical Approach to Causatives," *Journal of Linguistic Research*, 2(3), 77-105.
- Simpson, J. (1983) "Resultatives," *Papers in Lexical-functional Grammar* eds. Lori Levin, Malka Rappaport and Annie Zaenen, 143-157, Indiana University Linguistic Club: Bloomington.
- 鈴木亨(2013)「構文における創造性と生産性」『山形大学人文学部研究年報』(10), 109-130.
- 高見健一(1997)『機能的統語論』くろしお出版.
- 都築雅子(2004)「行為連鎖と構文II：結果構文」中村芳久(編)『認知文法論II』, 89-136, 大修館書店.
- Verspoor, C. M. (1997) *Contextually-dependent Lexical Semantics*. Doctoral Dissertation, University of Edinburgh.
- Washio, Ryuichi. (1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation," *Journal of East Asian Linguistics*, 6, 1-49.
- Wechsler, Stephen. (1997) "Resultative Predicates and Control," *Texas Linguistic Forum 38: The Syntax and Semantics of Predication*, ed. by R. Blight & M. Moosally, 307-21. University of Texas Department of Linguistics: Austin, Texas.
- Wechsler, Stephen. (2005) "Resultatives under the 'Event-argument Homomorphism' Model of Telicity," *The Syntax of Aspect*. N. Erteschik-Shir & T. Rapoport (eds.), 255-273. Oxford University Press: Oxford.
- 山根一文(2013)「英語の結果構文における結果述語の認可条件」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』(45), 59-64.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)

結果構文再考

緒 方 隆 文

Reconsideration of Resultative Constructions

Takafumi OGATA

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第29号
2018年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 29
2018